Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-14

個人 - 集団意思決定とコミュニケーション・モードの差異における意思決定に関する研究

藤田, 瑞希
城, 仁士

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,9(1):11-16

(Issue Date)
2015-09

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81009121

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009121

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 研究紀要 第9巻 第1号 2015
Bulletin of Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University, Vol.9 No.1 2015

研究論文

個人－集団意思決定とコミュニケーション・モードの差異における意思決定に関する研究

Research of individual and group decision-making and decision-making of the difference in communication mode

藤田　瑞希 *　　城　仁士 **
Mizuki FUJITA *　Hitoshi JOH **

要約：本研究では、意思決定における後悔の大きさとコミュニケーション・モードの差異が後悔の大きさに与える影響について実験的に検討した。個人意思決定と集団意思決定と集団内の個人に明示的に責任のあるリーダーの役割を与えた対面コミュニケーション（FTF）での集団意思決定と同様に役割を与えたコンピュータ・コミュニケーション（CMC）の集団意思決定の４つの条件で比較した。参加者は、個人と３人１組の集団と３人のうち２人はサクラとなっているFTFとCMCの集団に割り振られ、「品物を安い順に並べる課題」に取り組み、失敗した。そして、後悔の大きさとその他の感情項目、コントロール感、課題失敗の要因帰属、FTFとCMCのコミュニケーションに関する８つの質問項目について評定を求めた。集団条件は個人条件とFTF条件のどちらよりも後悔が小さく、コントロール感についても同様の結果が見られた。また、予測されていなかった楽しさが、FTF条件と集団条件において、個人条件よりも大きかった。この結果から、意思決定における後悔の大きさは、コントロール感や責任の大きさだけでなく、楽しさも影響している可能性が示唆された。その他、役割分担と他者存在感認知が意思決定における後悔に与える影響の可能性も論じた。

キーワード：後悔、集団意思決定、コンピュータ・コミュニケーション、役割

問題と目的

我々は、日々あらゆる選択肢から、その時点で自分が最良と思う選択を検討し、意思決定を行っている。毎日の食事や電車の乗り継ぎなどの日常の選択から、受験や就職、結婚など人生の選択まで多種多様な意思決定を行う。こうした意思決定に影響を与えるものとして後悔感情が知られている（Bell, 1982, Gilovich & Medvec , 1995）。人の意思決定と後悔に関連する研究はこれまでに数多く行われてきた。そのうちの１つに意思決定によって生じる後悔の心理プロセスを示した研究として規準理論があげられる（Kahneman & Miller, 1986）。規準理論によると、人はある行動を選択し、その行動をしたことで得られた結果を念頭におき、その選択した行動や実際に起こった結果だけでなく、選択しなかった行動やその場合に起きたであろう結果に関する様々な事柄を収集し、新たな規準を設ける。そして、今実際に起こっている結果とその規準を比較することによって後悔感情が芽生えるとしている。すなわち、実際の結果とそのかわりに何が起こり得たかを比較するとき、人は後悔を感じるという。また、後悔理論によれば、人は後悔感情を予期して、それを回避しようとする決定を行う（Bell, 1982）。これらの研究は、今まで効用最大化で説明されてきた意思決定現象に新たな知見を与えている。すなわち、効用最大化では説明がつかない意思決定現象でも、後悔最小化という視点から説明が可能であるということである。また、一度経験した後悔を避けようと、個人の行動を変える機能があることも知られている（上市・楠見，2004）。

これまでの意思決定の研究は、個人意思決定が主流であったが、近年は集団意思決定にも注目されている。集団意思決定状況では、個人意思決定状況と比較して、後悔が小さくなる可能性が示唆されている（Ariely & Levav, 2000）。実際に、集団意思決定状況では個人意思決定状況よりも同じ文脈・結果であっても個人の後悔が弱まることが示されている（小宮・楠見・渡部，2007）。また、後悔の強さの量的な違いだけでなく、他者の存在に対し影響の受け方が異なるという質的な違いがあることもわかっている。このことは、他者との相互作用が存在し、社会的影響が増幅する集団状況において、後悔が個人状況とは違うより能動的な社会的作用をもつ可能性を示唆している。すなわち、集団意思決定では他者との結果を共有できるという特徴があげられており、他者と自分

*　大阪大学大学院生命機能研究科博士課程（神戸大学発達科学部平成26年度卒業）
**　神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授

（2015年３月31日　受付
2015年６月30日　受理）

の結果を比較する必要がないので、後悔が弱まるのではないかとしている（Ariely & Levav, 2000）。また、個人状況において、強い後悔を感じることは、その後の行動に変容を促すという（Gilovich & Medvec, 1995）。すなわち、個人意思決定において後悔することの意味は、将来の意思決定において同様の過ちを犯さないようにするということであり、意思決定の改善が図られると考えられる。

一方、集団状況の研究の一つに、Darley & Latane（1968）の実験がある。この実験では、発作を起こした人を目撃した際に、被験者一人で目撃した場合と被験者以外に4人の目撃者がいた場合では、発作を起こした人を助ける行動にでた人の割合は、前者の85%から後者の31%に減少することが示された。これは集団状況において、責任の分散が起こるということを意味している。すなわち、集団状況においてはその決定が失敗であるとわかっても、個人状況の時よりは責任を感じず、同様の意思決定状況に遭遇しても、同じ失敗が繰り返される可能性があり、意思決定の改善がみられない恐れがある。しかし、ここでもし、集団内おいても後悔を促すことができれば、失敗を避けることに役立つ可能性がある。小宮他（2007）の研究では、集団内で後悔が表明された場合、集団意思決定状況においても個人の後悔が強まることが示されている。これは、集団内の役割が一切なく、皆が同程度のコントロール感を持ち、結果の重要性を同じように感じている集団が想定されている。しかし一方、後悔はコントロール感と関連した感情であることが示されており（上市・楠見，2000）、コントロール感が小さいと後悔も小さくなることが知られている。加えて、村本・山口（1997）によると、集団の失敗は運や課題の難易度などの外的要因に帰属しがちであることも示されており、個人としての決定に対するコントロール感も小さくなると考えられる。すなわち、集団内において、明示的に責任のあるリーダーの役割を付与すれば、個人意思決定状況よりも個人の後悔を強める可能性があると思われる。明示的に責任のあるリーダーの後悔が強まることが明らかになれば、役割を与え明示的に責任のあるリーダーを設定する事で、集団意思決定の改善をはかれる可能性がある。これまでの研究では皆が同程度のコントロール感を持ち、結果の重要性を同じように感じていると想定して集団意思決定状況を検討している。しかし現実の集団は、はるかに複雑な構造をもっており、役割分担がはっきりしている集団や、コントロール感が成員間内で違う集団などがほとんどである。

そこで、本研究では、個人意思決定状況と集団意思決定状況での個人の後悔の大きさだけでなく、集団意思決定状況で個人に決定権を持つリーダーとしての役割を与え、役割の有無が後悔に及ぼす影響について、実験的に検討する。また、これまでの意思決定において着眼されてこなかった「楽しい」の感情項目についても分析し、楽しさが大きければ、後悔が小さくなるという仮説も検討する。

現在は、チャットができるLINEなどのSNSが人間の社会生活におけるコミュニケーション方法として必要不可欠なものとなってきている。今までの集団意思決定研究では、主に、対面状況（Face-to-Face, 以下FTFと略記）での集団が想定されているが、実際の社会生活では、コンピュータを媒介にしたコミュニケーション（Computer-mediated Communication, 以下CMCと略記）が増加しており、CMCが意思決定に与える影響を無視することはできない。原田（1997）によれば、CMCはFTFに比べてコミュニケーションを行いやすいとしており、CMCの方がFTFに比べて、コミュニケーションの当事者は、コミュニケーションにおける対人圧力を弱く認知することも知られている（木村・都築，1998）。コミュニケーションにおいて対人圧力が弱いということは、初対面の人や目上の人と話し合う際に感じる緊張感や集団の中で自分の意見を通そうとする時に感じる心理的負担といったものが小さいということを意味する。すなわち、対人認知もしくは他者認知が希薄になるということである。また、集団成極化現象のように、集団での決定が極端な方向にシフトしやすいという知見が多く、木村・都築（1998）の研究では、CMCではFTFに比べてリスキーな意思決定を行いやすくするとしている。これはCMCではFTFに比べて他者の存在感認知が希薄であるため、議論が非現実化し、リスクに対する抑止が効かなくなると考えられているからである。もし、集団意思決定において、他者存在感認知と後悔の強さに関連があるならば、テレビ電話などCMCの他者存在感認知を強めることでCMCにおける集団意思決定の改善に繋がる可能性があると考えられる。さらに、集団意思決定における後悔を扱った研究で、他者が後悔を示した場合、表明しなかった場合に比べて後悔がより強まったという結果が得られている（小宮他,2007）。このことから、より他者認知が希薄になると考えられるCMCではFTFよりも後悔が小さくなることが予測される。

そこで、本研究では、集団意思決定状況で決定権を与えられた個人に関してFTFとCMCを比較し、CMCが意思決定に与える影響について、実験的に検討する。

方　法

参加者

K大学学部生77名（個人条件　19名，　集団条件　18名，FTF条件　22名，CMC条件　21名；男性37名，女性43名）。個人条件では1人で、集団条件では3人1組で、FTF,CMC条件ではともに、3人1組でそのうち2人はサクラで課題を行った。集団は、同性のみで構成され、互いに面識がないように統制した。

課題と手続き

実験状況で用いたのは、「品物を安い順に並べる課題」であった。コンビニエンスストアで売られている品目8種類（菓子3種類，洗剤，レトルト食品（カルボナーラ），缶詰，ペットフード，アルカリ電池）について、価格の安い順番に並び替えるという課題である。この課題は、小宮他（2007）の実験研究において用いられていたものを採用した。この課題を用いた理由は以下の通りである。第一に、Gilbert, Morewedge, Risen, & Wilson（2004）の行動実験研究に用いられ、参加者が後悔することが確かめられている点である。第二に、学生参加者になじみのあるコンビニエンスストアで売られている品物を用いることにより、注意していれば正解するかもしれないという期待を強く抱かせると同時に失敗した場合に後悔の程度を大きくできるのではないかという点の2点である。

実験状況でプレテストを数回行い、幾種類かの手続きを試した

後、もっとも多くの人が後悔すると答えた以下の手続き（小宮他, 2007）を採用した。

まず、参加者にはコンビニエンスストアで売られている8個の品物が現物で提示され、安い順に並び替える課題であることが知らされた。同じ品物について3回の解答権が与えられ、1、2回目の解答後、その時点であっている品物を限られた数だけ（1回目四つ、2回目二つ）伝えられた。また、最終決定時に全問正解の場合のみ課題成功とする旨が説明された。それぞれ解答するまでの制限時間は1回目3分、2回目3分、3回目1分で、CMCのみ1回目6分、2回目6分、3回目3分であった。説明後、実際に8個の品物が現物で提示された。実際には、間違っていても1回目の解答時には、4つの正答（1，2，3，8位）、2回目の解答時には2つの正答（4，7位）が提示され、3回目の最終決定時に順位がわからないものは2つだけ（5，6位）になるよう操作された。3回目の解答後、参加者は課題に失敗した旨を10円相当のお菓子を渡されることで知らされた。

従属変数

6種類の感情項目（フィラー項目）[1)] と共に楽しさと後悔をリッカートスケール7件法（1：全くそう思わない～7：非常にそう思う）で評定させた。続いて自分個人あるいは自分の集団の失敗についての要因帰属4種類、および課題の結果に対するコントロール感（この課題の結果は、私個人が決められる状況にあった。）について同様の尺度で評定させた。要因帰属に関しては、小宮他（2007）を参考に、内的要因として「努力」（私がこの課題を一生懸命やったかどうかがこの結果に影響していると思う。）、「能力」（この課題の結果には、私の日常における注意がよく反映されていると思う。）、外的要因として「課題の難しさ」（この課題の結果は、課題の難易度によるものだと思う。）、「偶然」（課題がこの結果だったのは、偶然にすぎないと思う。）の項目を用意し、それぞれの平均値をとったものを分析に用いた。

また、FTFとCMCの条件では、木村・都築（1998）で用いられた8つの質問項目（伝達性、エンジョイ度、話し易さ、緊張感、スピード感、気軽さ、明るさ、存在感）を用い、同様の尺度で評定させた。

実験条件

参加者は、実験室で「日常における注意に関する課題」として課題の教示を受けた。課題に失敗した場合には10円相当のお菓子、成功した場合には1000円の現金が獲得できると教示され、成功への動機づけが高められた。

個人条件では、参加者は実験室において、個人で課題を遂行した。集団条件とFTF条件では、実験室内で対面した後に集団で課題を行う旨を説明され、話し合い、集団で課題を遂行した。CMC条件では、参加者は個人で説明を受けた後、コンピュータあるいはスマートフォン（参加者の使いやすい方を選択した。）を用いて、別室にいる2人とチャットで話し合い、集団で課題を遂行した。FTFとCMC条件の決定権に関しては、あらかじめサクラ2人を待機させておき、最後に入室した参加者が決定権をもつという旨が説明された。FTFとCMC条件におけるサクラの2人は、決定に関する断定的な意見を避け、互いに違う意見になるようあらかじめ渡された台本に従い発言し、第1発言者は参加者となるように操作した。また、集団・FTF・CMC条件では互いの個人的な情報交換は禁止とした。最終決定の後は、いずれの条件でも参加者はパーティションで区切られたブース内に移動し、課題が失敗であったことを、実験者から失敗の報酬である10円相当のお菓子を渡されることで知らされた。すなわち、失敗の情報はどの条件でも、個人状況でフィードバックするように統制した。その後引き続き、参加者は質問紙に記入し、用紙の回収後、課題の目的を知らされた。

実施にあたっては、個人情報保護の観点から、個人情報を特定できない方法で実施し、発表にあたっても集合データとして取り扱うことを理解してもらった上で、任意で実験に協力してもらった。また、倫理的観点から、実験終了後に全ての参加者に成功報酬の10分の1の現金が、実際に成功した参加者には成功報酬1000円の現金が渡された。

結　果

操作チェック

実験後のインタビューによる参加者の回答から、課題失敗のフィードバックがほとんどの参加者に対して有効になされていたことが確認されたが、サクラであることに気づいた2名（FTF条件1名, CMC条件1名）、お互いの個人情報を交換した1名（FTF条件）を分析対象から除き、20名ずつを分析対象とした。

コントロール感について

課題の結果に対するコントロール感の平均値・標準偏差を表1に示した。

表1　後悔, コントロール感, 楽しさ, 要因帰属の平均値と標準偏差

	平均値（標準偏差）			
従属変数	個人条件 (n=19)	集団条件 (n=18)	FTF条件 (n=20)	CMC条件 (n=20)
後悔	**5.53(1.35)**	**3.50(1.92)**	**6.00(0.97)**	**4.75(2.20)**
コントロール感	6.00(1.25)	3.50(1.62)	5.20(1.94)	4.95(2.11)
楽しさ	4.11(1.49)	5.33(0.91)	5.30(1.26)	4.25(1.68)
内的要因	4.53(1.86)	4.36(1.57)	4.30(1.79)	4.73(1.57)
外的要因	3.45(1.67)	3.86(1.74)	4.15(1.79)	3.63(1.60)

評定＝1（全くそう思わない）－7（非常にそう思う）

4つの条件間で、コントロール感に差があるかどうか調べるため、1要因分散分析を行ったところ有意（$F(3,73)=6.39$, $p<.001$）で、Tukey法による多重比較の結果、集団条件は、個人条件およびFTF条件より低く、自分の課題の結果が左右できなかったと感じていた。このことから本実験では、集団条件では、個人条件とFTF条件よりもコントロール感が小さいことが確認できた。

後悔について

平均値・標準偏差を同じく表1に示した。4つの条件間で、後悔に差があるかどうか調べるため、1要因分散分析を行ったとこ

1）具体的には、嬉しい、安心している、がっかりしている、満足している、怒っている、悲しいの6項目であった。研究の目的を伏せる意図で質問紙に記載したが、本研究の目的とは直接関係がないことから、結果は割愛した。

ろ有意（$F(3,73)=7.95$, $p<.001$）で、Tukey 法による多重比較の結果、集団条件は、個人条件および FTF 条件より低く、後悔をあまり感じていなかった。しかし、個人条件の方が、FTF 条件よりも後悔が小さくなるという予測は、有意でなかった（$F(3,73)=0.88$, $p=.81$）。また、コントロール感と後悔の評定値は、有意に弱い正の相関が見られた（$r(77)=.22$, $p<.05$）。

楽しさについて

平均値と標準偏差を表 1 に示した。4 つの条件間で、差があるか調べるために、1 要因分散分析を行ったところ有意（$F(3,73)=4.43$, $p<.001$）で、Tukey 法による多重比較の結果、個人条件は、集団条件および FTF 条件より低く、あまり楽しいとは感じていなかった。また、課題遂行単位（個人・集団・FTF・CMC）×感情項目（後悔・楽しい）について 2 要因分散分析を行った結果、交互作用効果が有意であった（$F(3,146)=7.59$, $p<.001$）。

Bonferroni 法による多重比較の結果、課題遂行単位における感情項目の単純主効果では、個人条件において“後悔”の評定が“楽しい”の評定よりも有意に高く（$F(3,146)=8.17$, $p<.05$）、集団条件においては有意に低かった（$F(3,73)=12.89$, $p<.001$）。

要因帰属について

結果に対する失敗の要因帰属の、条件ごとの平均値・標準偏差を表 1 に示した。課題遂行単位（個人・集団・FTF・CMC）×失敗の要因帰属（内的要因・外的要因）について 2 要因の分散分析を行った結果、失敗の要因帰属の主効果は有意だったが、（$F(1,300)=13.28$, $p<.001$），先行研究と同様に交互作用効果は有意でなかった（$F(3,300)=1.46$, $p=.22$）。

FTF と CMC におけるコミュニケーションの評価について

FTF と CMC のコミュニケーションの評価を測定した 8 つの質問項目をもとに因子分析を行った。まず、8 項目の相関行列を求め，それに基づいて主因子法による因子分析を行った。スクリーテストの結果を参考に因子数を 2 に決定した（因子 2 までで全分散の65.01%が説明できる）。

因子負荷行列を基準化バリマックス法によって回転し、項目選択の際には、因子負荷量が .7以上で他の因子に対する負荷量が .3以下であることを基準とした。結果は表 2 に示す通りである。

表 2　8 つの質問項目の因子分析

	因子 1	因子 2
Q8 相手を身近に感じることができましたか	**0.894**	−0.158
Q7 コミュニケーションは明るいと感じましたか	**0.833**	−0.034
Q3 話しやすかったですか	**0.832**	0.140
Q2 会話や議論を楽しむことができましたか	**0.746**	0.046
Q6 気軽にコミュニケーションできましたか	**0.733**	0.204
Q1 自分の意思や意見を十分に伝えられましたか	−0.128	**0.954**
Q5 意思伝達は素早く行えましたか	0.145	**0.711**
Q4 緊張しましたか	−0.027	−0.463
固有値	3.318	1.720
寄与率	41.47%	21.50%

第 1 因子に着目すると，Q 2 “エンジョイ度”、Q 3 “話しやすさ”，Q 6 “気軽さ”、Q 7 “明るさ”、Q 8 “存在感”といった項目がすべて高い負荷量を示している。この因子は先行研究（木村・都築，1998）を参考に、「コミュニケーションにおける対人圧力を表す因子」と解釈することができる。

一方、第 2 因子をみると、Q 1 “伝達性”、Q 5 “スピード感”によって因子が構成されており、この因子は原田（1997）の「インタフェースのよさに関する評価因子」と同等のものであると考えられる。

第 1 因子の因子スコアを従属変数として、t 検定を行ったところ、FTF と CMC で有意差はみられなかったが（$t(38)=0.72$, $p=0.47$）、第 2 因子の因子スコアを従属変数として、t 検定を行ったところ、FTF の方が CMC よりも有意に高かった（$t(38)=2.29$, $p<.05$）。つまり、CMC の方が FTF よりも道具としての操作性が有意に悪かったと言える。

第 1 因子と第 2 因子における FTF と CMC の因子スコアの平均値を図 1 に示した。

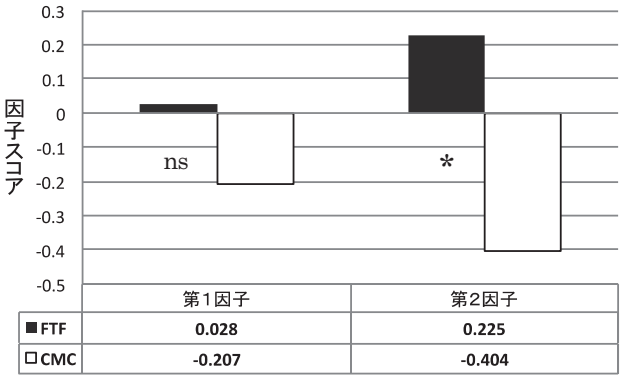

図 1　各因子における FTF と CMC の因子スコアの平均値

考　察

先行研究と同様に、集団意思決定状況は、個人意思決定状況よりも、コントロール感を低減し、後悔を小さくしたと考えられる。しかし、集団意思決定状況で決定権を与えられた個人では、個人意思決定状況よりも後悔の平均値は高かったものの、有意な差は認められなかった。この結果は、集団意思決定状況に明示的に責任のあるリーダーという役割を与えた場合、集団意思決定状況の個人の後悔を強める可能性を示唆している。しかし、本来予測していた個人意思決定状況よりも後悔が強まらなかったことから、コントロール感と責任の大きさだけが意思決定における後悔の大きさを左右するわけではないと考えられる。この結果の原因として第一にあげられるのは、同様の課題を用いた先行研究よりも課題の成功報酬額を500円下げたことで結果の重大さが小さくなり、課題内容のゲーム性が強まった点である。課題内容のゲーム性が強いことで、個人よりも集団の方が“楽しい”という感情が大きくなり、後悔が小さくなったのではないかと考えられる。実際に、個人条件よりも集団条件，FTF 条件の方が有意に楽しさを感じており、個人条件では、楽しさが後悔より有意に高く、集団条件ではその逆となっている。このことは、感情項目（後悔・楽しさ）と課題遂行単位の 2 要因分散分析の結果からも言える。

第二に、後悔は結果の重大さと正の相関を持つことが知られているが、（Connolly&Zeelenberg, 2002）今回の課題はゲーム性が強まったことで、参加者が結果の重大さを低く感じており、このことは、楽しさを感じていることからも示される。また、人は、将来起こる結果をメンタルシミュレーションして後悔という感情

を最小化する決定を行うと言われているが（上市・楠見，2000）[2]、本研究では課題失敗の際の損失がなかったために、FTF 条件と個人条件において後悔感情の差異が見られなかったと考えられる。

第三に、FTF 条件、CMC 条件ともに決定権のある個人に関して、最後に入室した人を無条件にリーダーとしており、リーダーとなったことの偶然性が強すぎたため、リーダーとしての責任を感じにくかったと考えられる。そのために、集団状況においての責任分散が起こり（Darley & Latane, 1968）、後悔が強まらなかったのではないかと考えられる。

FTF 条件と CMC 条件において、有意差が見られなかった理由は、想定していた対人圧力得点において有意差がなかったことがあげられる。CMC 条件の方が FTF 条件よりも対人圧力を感じないですむことから（木村・都築，1998）、決定権のある個人に関して CMC 条件の方が、後悔が小さくなると予測されたが、本研究では対人圧力得点の有意差は見られなかった。これは、インタフェースのよさに関して有意差がみられたことからわかるように、操作性が CMC において非常に悪かったことから、FTF と同様には議論が深まらず、対人圧力の有無について感じ取る暇がなかったと考えられる。実際に、議論内に結果が決まらずタイムアップで参加者がそれまでのチャット内容から総合して決めることが多く、ここでも責任の分散がみられたため、後悔の大きさに有意差がみられなかったと推察される。

今後の発展に関しては、検討すべき点が少なくとも三つ挙げられる。一つ目は、集団意思決定において役割分担がはっきりしている集団において、個人意思決定状況よりも後悔を強める条件とは何か、あるいは役割分担は意思決定における後悔に影響しないのかという点である。本研究では、明示的に責任のあるリーダーの選定において偶然性が強調されているが、明示的に責任のあるリーダーを集団の意思決定によって選定した集団においては、責任の大きさが変わってくると考えられる。本研究では役割分担の選定の仕方は特に統制されておらず、今後さらなる工夫が必要である。

二つ目は、結果の重要性と後悔の大きさに楽しさがどう影響するかという点である。本研究では、楽しさが後悔を弱める可能性が示唆されたが、結果の重大さや他者存在感認知との関連は明確にできていない。深刻な結果に繋がるような意思決定において、役割分担のはっきりしている集団では楽しさの影響が出ず、個人意思決定状況よりも後悔が大きくなる可能性も考えられる。本研究の課題はゲーム要素が強く、失敗した場合の損失がないため、より深刻な結果をもたらす場合の強い後悔に関しても同じメカニズムが働くかは不明であるため、結果の重要さを独立変数として、今後検証すべきであろう。

三つ目は、他者存在感認知は、意思決定における後悔の大きさにどう影響するのかという点である。本研究では、CMC での議論の時間が FTF の 2 倍としているが、同じ議論でも意思決定までにかかる時間が CMC は FTF の 4 倍かかるとする研究もあり（木村・都築，1998）、意思決定までの時間が十分でなかったと言える。個人意思決定状況では他者から後悔表明を受けても後悔が強まらなかったが、集団意思決定状況における個人の後悔は強まった（小宮他，2007）ことから、集団意思決定状況においては他者存在感認知がなんらかの影響を与えると考えられる。CMC の議論時間を十分にとった上で、今後検証すべきであろう。

2）この場合の後悔とは、「自分自身がリスク志向行動をして、リスクが発生し損害が生じた場合を想像したときに、リスク志向行動をしなければよかった」という感情。

結　論

本研究は、個人意思決定と集団意思決定を直接的に比較しただけでなく、集団意思決定に明示的に責任のあるリーダーとしての役割を与えた点、FTF の集団だけでなく CMC の集団も想定し比較した点において、今までの研究に新しい視点を導入したとして意義があると考えられる。また、意思決定における後悔の大きさに影響を与えるものとして、コントロール感や責任の大きさだけでなく、今まで着眼されていなかった楽しさに焦点をあてた点で意義深いと言える。

本研究では、後悔が集団意思決定の改善という目的に役立つという立場にたっているが、後悔を強めるメカニズムの存在は、結果の重大さに対し過度の後悔を感じさせることで、もう一度同じ意思決定をしなければならない際に誤った判断を導く危険性をもっており、生活の中での強い後悔に関する研究では（Gilovich & Medvec, 1995）、いかに後悔を小さくするかということが課題になっている。結果の重大さに応じた後悔を利用することが重要であると言える。

集団意思決定における後悔の研究は、まだ始まったばかりで集団サイズや、成員間の相互作用やコントロール感の大きさ、結果の重大性などを実験的に統制するような研究は未だ行われていない。今回の研究を踏まえた上で、グループダイナミクスを考慮した集団意思決定の研究として展開していく必要がある。さらに、後悔が意思決定の改善に寄与するのか、他に意思決定の改善の可能性はないかなど検討する余地は大きい。今後の課題としたい。

引用文献

Ariely, D., & Levav, J.（2002）. Sequential choice in group settings: Taking the road less traveled and less enjoyd. *Journal of Consumer Research*, 27, 279-290.

Bell, D. E.（1982）. Regret in decision making under uncertainty. *Operation Research*, 30, 961-981.

Connolly, T., & Zeelenberg, M.(2002). Regret in decision making. *Current Directions in Psychological Science*, 11, 212-216.

Darley, J. M., & Latane, B（1968）. Bystander intervention in emergencies: Diffusion of responsibility. *Journal of Personality and Social Psychology*, 8, 377-383.

Gilbert, D. T., Morewedge, C. K., risen, J. L., & Wilson, T. D.（2004）. Looking forward to looking backward: The misprediction of regret. *Psychological Science*, 15, 346-350.

Gilovich, T., & Medvec, V. H.（1995）. The experience of regret: What, when and why. *Psychological Review*, 102, 379-395.

原田悦子（1997）. 人の視点からみた人工物研究　共立出版

Kahneman, D., & Miller, D. T. (1986). Norm theory: Comparing reality to its alternatives. *Psychological Review*, 93, 136-153.

木村泰之・都築誉史 (1998). 集団意思決定とコミュニケーション・モード －コンピュータ・コミュニケーション条件と対面コミュニケーション条件の差異に関する実験社会心理学的検討－ 実験社会心理学研究, 38, 2, 183-192.

小宮あすか・楠見 孝・渡部 幹 (2007). 個人－集団意思決定における後悔 心理学研究, 78, 2, 165-172.

村本由紀子・山口 勤 (1997). もうひとつの self-serving bias －日本人の帰属における自己卑下・集団奉仕傾向の共存とその意味について－ 実験社会心理学研究, 37, 65-75.

上市秀雄・楠見 孝 (2000). 後悔がリスク志向・回避行動における意思決定に及ぼす影響 －感情・パーソナリティ・認知要因のプロセスモデル－ 認知科学, 7, 139-151.

上市秀雄・楠見 孝 (2004). 後悔の時間的変化と対処方法－意思決定スタイルと行動選択との関連性－ 心理学研究, 74, 487-495.